

「坊っちゃん」の語り

道園 達也¹

Narration of “Botchan”

Tatsuya Michizono¹

“Botchan” is a story generated by the first person “Ore” write and speak to someone. Narration of “Botchan” can be grasped uniformly by using the concept of implied author. As a result, the place of narrative is conscious. In the place of narrative, what are the attributes of narratee? The narrator uses multiple first person “Watashi” “Boku” “Ore” in the conversation. They are used according to the conversation partner and the scene. Analyzing how to use them reveals attributes of narratee when the narrator uses “Ore”. In the story of “Botchan”, the narrator and narratee have various attributes.

キーワード：一人称の「おれ」、内包された作者、語りの場、聞き手

Keywords : the first person “Ore”, implied author, place of narrative, narratee

1. 課題設定

「坊っちゃん」⁽¹⁾は「おれ」が誰かに書き、そして話すことで生成する物語である。

書き、そして話すことというのは「こんな事を書けばいくらでもある」(二、p. 24)⁽²⁾とある一方、「それはあとから話すが」(六、p. 71)や「清の事を話すのを忘れていた」(十一、p. 142)とあるように両者が混在しているからである。ただし、「おれ」が書いた部分と話した部分とを厳密に分割することはできない。

「坊っちゃん」における「書く」と「話す」の混在について、中島国彦は「坊っちゃんの「性分」、『坊っちゃん』の性格」⁽³⁾において「書く」という言葉が使われているのは「作者が顔を出し過ぎてしまったということであろう」と指摘し、次のように述べている。

これを一つのミスなどと考えるのではなく、『坊っちゃん』という作品では書くことと語ることが互に触手を出し合って融合していること、そこに作者と主人公の心情の通い合いが存在する、というようにプラスの方向で理解した方がよいのはいうまでもない。

中島国彦は「書くこと」に「作者」が表れているとした上で、「書くことと語ること」の「融合」に「作者と主人公の心情の通い合いが存在する」と述べている。「作者と

主人公」の親密な関係に基づいて「書くこと」に「作者」が表れているとすれば、「語ること」には「主人公」が表れているということになるであろう。そこで「話す」は「語る」に変換されている。

また、遠藤祐は『坊っちゃん』(夏目漱石)⁽⁴⁾において「清に宛てた手紙の文句は、すべてで一六八字に尽きている」ことから「おれ」が「長い手記を書けるとは、とても思えない」と指摘し、「書く」を除外した上で、次のように述べている。

物語のなかほどに「それはあとから話すが」(六。傍点引用者)とあり、終わりにも「清の事を話すのを忘れていた」(十一。傍点同)とあるように、「坊っちゃん」は、やはり〈おれ〉が誰かに語ったところを、聞き手自身もしくはそばにいたものが筆記した物語とみるべきだろう。

遠藤祐は「おれ」の行為から「書く」を除外し、「〈おれ〉が誰かに語った」ことを「聞き手自身もしくはそばにいたものが筆記した」と述べている。その上で、「聞き手」を「ある一人の人物」と想定し、「〈おれ〉はほかならぬ作者を相手に、自身の体験を勢いこんで語っているのかもしれない」とも述べている。「書く」のは「おれ」ではなく、「聞き手自身もしくはそばにいたもの」であり、ひいては「作者」であるということであろう。そこでも「話す」は「語る」に変換されている。

「坊っちゃん」における「書く」と「話す」の混在に言及する先行研究において、「作者と主人公」、あるいは「聞き手自身もしくはそばにいたもの」と「作者」が結び付けられている。それによって「書く」は「作者」の表れと見

¹ リベラルアーツ系
〒866-8501 熊本県八代市平山新町 2627
Faculty of Liberal arts
2627 Hirayama-Shinmachi, Yatsushiro-shi, Kumamoto, Japan
* Corresponding author:
E-mail address: mitizono@kumamoto-nct.ac.jp (T.Michizono).



図1 物語論モデル

なされたり、「おれ」の行為から除外されたりする一方で、「話す」は「語る」と換言されている。

しかし、「おれ」は「こんな事を書けば」や「あとから話す」などと語っているのである。「書く」ということを「書く」こととして、また「話す」ということを「話す」こととして読むことはできないだろうか。そのためには「作者と主人公」、および「聞き手自身もしくはそばにいたもの」と「作者」の関係を整理することが求められよう。

そこで、それらの関係を整理し、「坊っちゃん」における「書く」と「話す」を統一的に把握することを本稿の第一の目的とする。そのために、物語論における内包された作者の概念を援用する。従来の「坊っちゃん」論において、内包された作者の概念は言及されたことがないようである。では、それによって「坊っちゃん」の語りは、どのように考えられるようになるだろうか。それを明らかにしつつ、次いで「おれ」は誰に対して書き、そして話すのかについて検討を加える。

2. 「書く」と「話す」の統一的把握

物語論における内包された作者 (implied author) とは、ジェラルド・プリンス⁽⁵⁾によれば現実の作者 (author) と区別される、読者が抱く「テキスト中の作者の明確なイメージ」であり、また、語り手 (narrator) とも区別される、「状況・事象を報告することはないが、状況・事象の選択、配分、統合には責任を持つ」ものである。すなわち、内包された作者は現実の作者と語り手の中間に位置づけられる。それに、現実の読者 (reader)、内包された読者 (implied reader)、聞き手 (narratee) という対応する概念を加えて、物語論モデルとして示せば図1のようになる。

語り手の行為は書くことや話すことを含む。同様に聞き手の行為は読むことや聞くことを含む⁽⁶⁾。また、内包された作者を設定し、語り手と区分すること、すなわち内包された読者を設定し、聞き手と区分することで語り手と聞き手のコミュニケーションが自立する。そのようなコミュニケーションが行われる場所を、話りの場 (place of narrative) と呼ぶことにする。

そう考えると、「作者と主人公」、および「聞き手自身も

しくはそばにいたもの」と「作者」が区分され、「作者」は現実の作者 (author)、「主人公」は語り手 (narrator)、「聞き手自身もしくはそばにいたもの」は聞き手 (narratee) に対応する。また、「坊っちゃん」における「書く」と「話す」は「おれ」の「語り」の下位区分として統一的に把握される。「おれ」は誰かに書き、そして話す。その話りの場は「書く—読む」と「話す—聞く」というコミュニケーションの複合体である。そういう話りの場において「おれ」が語り手として誰かに書き、そして話すこと (状況・事象の報告) が、内包された作者によって編集 (状況・事象の選択、配分、統合) される。それが「坊っちゃん」の物語 (story) である。

3. 聞き手の属性

内包された作者の概念を援用することは「坊っちゃん」の語りを整理するとともに、語り手としての「おれ」と聞き手のコミュニケーションが行われる場所、すなわち話りの場を観察する立場を意識化させる。そこで、「坊っちゃん」における聞き手は誰かということについて検討することにする。ただし、誰かと問うても特定の人物を指摘することはできない。というのは「坊っちゃん」には、それを明らかにする手がかりがないからである。菅原克也が「一人称語りと聞き手」⁽⁷⁾において指摘しているように、語り手は「物語世界に姿をあらわす聞き手と、物語世界に姿をあらわさない聞き手」の二種類に分けられるのであり、『坊っちゃん』の場合、「坊っちゃん」の話聞きとめる聞き手 (narratee-listener) が物語世界に登場することはないのである。そのため、明らかにできるのは聞き手の属性でしかない。

「坊っちゃん」における聞き手について、小森陽一は「裏表のある言葉」⁽⁸⁾において「潜在的な聞き手が想定されている」とし、「その聞き手は男の行為を「無関」と批評する、いわば〈常識ある他者〉である」と指摘した。それ以来、語りという観点での多様な研究が積み重ねられている。

高田知波は「無鉄砲」と「玄関」⁽⁹⁾において「主人公・坊っちゃんの自称の使われ方を整理」し、場面や相手という観点で9つに分類している。それに基づいて「坊っちゃんが一人称代名詞を聞き手に応じてかなり意識的に使い分けて

いたという事実」を指摘し、「おれ」が「おれ」だけで通している相手は清ひとりである」ことを根拠に「聞き手としての清」の可能性を検証している。

また、十川信介は「活字と肉筆のあいだ」⁽⁴⁰⁾において夏目漱石の一人称小説を幅広く検討し、「坊っちゃん」において「語り手としての「おれ」は一貫してこの自称を用いているが、その語りのなかに引用される会話文では、彼は「僕」と「私」と「おれ」の三種を時と場合によって使いわけている」と指摘し、「「おれ」は、この人物が気を許した相手、または我を忘れたときのぞんざいな自称」であると述べている。

そして、菅原克也は前掲の「一人称語りと聞き手」において語りに関する理論的な検証、およびR・L・ステイーヴンソン「ファレサアの浜」との比較によって「坊っちゃん」を「坊っちゃん」として受け入れる聞き手、「坊っちゃん」が誘う笑いを、笑いとして引きうける聞き手が要請されると述べている。

以上の研究成果を踏まえつつ、本稿では「おれ」が語る内容における一人称の用法を比較検討し、聞き手の属性を明らかにする手法を採ることとする。この手法は「坊っちゃん」について高田知波が本格的に、また、夏目漱石の他の小説も含めて十川信介が採用している。

「坊っちゃん」における語り手としての「おれ」は一貫して「おれ」という一人称を使用している。また、語る内容における会話文では「私」「僕」「おれ」という一人称を相手や場面に応じて使い分けている。そのため、それらの一人称の用法を比較検討し、相手の属性を明らかにすることで、語り手としての「おれ」が「おれ」という一人称を使用する際の聞き手の属性を析出できる。

本稿では、先行研究で検討されている用例に、いくつかの用例を加えて、一人称の種類別、相手別に検討を加える。なお、「坊っちゃん」本文で会話文を示すカギ括弧（「」）が使用されている場合と、それが使用されていない場合がある。後者は引用に際して、会話文と判断される部分をヤマ括弧（〈 〉）で示した。また、底本に施されているルビは、すべて省略した。

3.1 「私」の場合

「おれ」が語る内容において、「私」という一人称は職員会議での発言、および校長に対する発言で使用される。

- ① —1「私は徹頭徹尾反対です……」(六、p. 69)
—2「私は正に宿直中に温泉に行きました。これは全くわるい。あやまります」(六、p. 71)
- ② —1あんまり腹が立ったから、〈それじゃ私が一人で行って主筆に談判する〉といったら(十一、p. 131)
—2「何で私に辞表を出せといわないんですか」(十一、p. 133)
—3「堀田には出せ、私には出さないで好いという法がありますか」(十一、p. 133)
—4「その都合が間違ってます。私が出さなくっ

て済むなら堀田だって、出す必要はないでしょう」(十三、p. 133)

—5「それじゃ私も辞表を出しましょう。堀田君一人辞職させて、私が安閑として、留まっていられると思っていらっしゃるかも知れないが、私にはそんな不人情な事は出来ません」(十一、p. 133)

—6「出来なくなっても私の知った事じゃありません」(十一、p. 133)

①—1、2の2例は職員会議での出席者一同に対する発言である。職員会議で使用される一人称は校長(狸)が「自分」、赤シャツ、野だ、山嵐がいずれも「私」である。「おれ」が他の職員と同じく「私」という一人称を用いたのは職員会議の場にふさわしい選択だったと言えよう。また、②—1～6の8例は校長に談判する場面での発言である。校長に対しては職員会議での発言と同じく、一貫して「私」という一人称が用いられている。したがって、「私」は自分より上位にあると見なす校長に対して、および校長が主宰する職員会議において使用される一人称である。そこには「おれ」の常識的な側面が、よく表れているように思われる。たとえば職員会議において「おれ」や「僕」という場違いな一人称を用いて発言しないことは「おれ」の常識的な側面の表れであろう。

3.2 「僕」の場合

「僕」という一人称は、赤シャツ、萩野の婆さん、山嵐に対して使用される。

- ③ —1「僕の前任者が、誰に乗せられたんです」(五、p. 56)
—2〈よろしい、僕も困るんだが、そんなにあなたが迷惑ならよしましょう〉と受け合った。(六、p. 61)
—3「さっき僕の月給をあげてやるという御話でしたが、少し考が変わったから断りに来たんです」(八、p. 97)
—4「僕の下宿の婆さんが、古賀さんの御母さんから聞いたのを今日僕に話したのです」(八、p. 98)
—5「あなたのいう事は尤もですが、僕は増給がいやになったんですから、まあ断ります。考えたって同じ事です。さようなら」(八、p. 100)
- ④ —1〈それじゃ僕も二十四で御嫁を御貰いければ、世話をして御くれんかな〉と田舎言葉を真似て頼んで見たら(七、p. 76)
—2「本当の本当のって僕あ、嫁が貰いたくって仕方がないんだ」(七、p. 76)
—3「何ですかい、僕の奥さんが東京で間男でもこしらえていますか」(七、p. 76)
—4「うん、マドンナですか。僕あ芸者の名かと思った」(七、p. 77)
- ⑤ —1「随分疲れるぜ。僕あ、おやじの死ぬとき一週間ばかり徹夜して看病した事があるが、あとでぼんやりして、大に弱った事がある」(十、p. 120)

—2「よろしい、いつでも加勢する。僕は計略は下手だが、喧嘩とくるとこれでなかなかすばしこいぜ」（十、p. 120-121）

③—1～5の6例は赤シャツに対する発言である。赤シャツに対して「僕」という一人称が使用されているのは、校長の下で働く同僚として対等の関係にあると見なされているからであろう。④—1～4の4例は萩野の婆さんに対する発言である。「おれは江戸っ子だから君らの言葉は使えない」（三、p. 27）と言っていた「おれ」が「田舎言葉を真似て」（④—1）いるのは、萩野の婆さんに対して親近感があるからであろう。⑤—1、2の2例は山嵐に対する発言である。これは山嵐を同志と見なす「おれ」の親近感の表れと考えられよう。したがって、「僕」は対等の関係にあると見なしたり、親近感を抱いたりする相手に対して使用される一人称であると考えられる。

3.3 「おれ」の場合

3.3.1 赤シャツ、萩野の婆さん、山嵐

赤シャツ、萩野の婆さん、山嵐に対しては「僕」という一人称だけでなく、「おれ」という一人称も併用されている。そこで、まず三者に対して「おれ」が使用される事例を取り上げる。

- ⑥ —1「おれも逃げも隠れもしないぞ。堀田と同じ所に待ってるから警察へ訴えたければ、勝手に訴える」（十一、p. 141）
- ⑦ —1「何でもいいでさあ、——全く赤シャツの作略だね。よくない仕打だ。まるで欺撃ですぬ。それでおれの月給を上げるなんて、不都合な事があるものか。上げてやるたって、誰が上がって遣るものか」（八、p. 95-96）
- 2「年寄のくせに余計な世話を焼かなくともいい。おれの月給は上がろうと下がろうとおれの月給だ」（八、p. 96）
- ⑧ —1「校長にはたった今逢った。暑い時には散歩もしないと宿直も骨でしょうと校長が、おれの散歩をほめたよ」（四、p. 37）
- 2「冗談じゃない本当だ。おれは君に氷水を奢られる因縁がないから、出すんだ。取らない法があるか」（六、p. 62）
- 3「一銭五厘受け取ればそれでいい。下宿を出ようが出まいがおれの勝手だ」（六、p. 62）
- 4「亭主が君に何を話したんだか、おれが知っているもんか。そう自分だけで極めたって仕様があるか。訳があるなら、訳を話すが順だ。てんから亭主のいう方が尤もだなんて失敬千万な事をいうな」（六、p. 62-63）
- 5「おれが、いつ下宿の女房に足を拭かせた」（六、p. 63）
- 6 山嵐は君それを引き込めるのかと不審そうに聞くから、くうんおれは君に奢られるのが、いやだ

ったから、是非返すつもりでいたが、その後段々考えて見ると、やっぱり奢ってもらう方がいいよ。だから、引き込ますんだ」と説明した。（九、p. 101）

—7「おれは江戸っ子だ」（九、p. 102）

—8「おれは無論行くんだ。古賀さんが立つ時は、浜まで見送りに行こうと思ってる位だ」（九、p. 102）

—9「勝手に飲むがいい。おれは肴を食ったら、すぐ帰る。酒なんか飲む奴は馬鹿だ」（九、p. 102）

—10「何でもいい、送別会へ行く前にちょっとおれのうちへ御寄り、話しがあるから」（九、p. 102）

—11「かんじんよりなら、おれにも出来そうだ」といったら（九、p. 104）

—12「じゃ演説をして古賀君を大にほめてやれ、おれがすると江戸っ子のぺらぺらになって重みがなくっていけない。そうして、きまった所へ出ると、急に溜飲が起って咽喉の所へ、大きな丸が上がって来て言葉が出ないから、君に譲るから」といったら（九、p. 105）

—13「愉快だ。そう事が極まれば、おれも加勢してやる。それで今夜から夜番をやるのかい」（十、p. 120）

—14「そんなら、おれは明日辞表を出してすぐ東京へ帰っちゃあ。こんな下等な所に頼んだっているのはいやだ」（十一、p. 130）

—15「それもよかろう。おれは策略は下手なだから、万事よろしく頼む。いざとなれば何でもする」（十一、p. 131）

—16 それから三日ばかりして、ある日の午後、山嵐が憤然とやって来て、いよいよ時機が来た、おれは例の計画を断行するつもりだというから、くそうかそれじゃおれもやろう」と、即座に一味徒党に加盟した。（十一、p. 132）

—17「そんな裁判はないぜ。狸は大方腹鼓を叩き過ぎて、胃の位置が顛転したんだ。君とおれは、一所に、祝勝会へ出てさ、一所に高知のぴかぴか踊りを見てさ、一所に喧嘩をとめに這入ったんじゃないか。辞表を出せというなら公平に両方へ出せというがいい。なんで田舎の学校はそう理窟が分らないんだろう。焦慮いな」（十一、p. 132）

—18「おれだって赤シャツと両立するものか。害にならないと思うなんて生意気だ」（十一、p. 132）

—19「それじゃおれを間のくさびに一席伺わせる気なんだな。こん畜生、だれがその手に乗るもんか」（十一、p. 132-133）

⑥—1の1例は山嵐とともに赤シャツと野だに「天誅」を加えた後の発言である。野だに対しては「おれ」という一人称を用いた発言がある（⑬—1）。赤シャツに対しては、ここで唯一「おれ」という一人称が用いられている。これは山嵐

の「おれは逃げも隠れもせん」(十一、p. 141)という直前の発言に倣った、対抗的な発言である。⑦—1、2の3例は萩野の婆さんに対する発言である。萩野の婆さんに対する一人称は「僕」が4例(④—1~3)で、「おれ」が3例である。両者はほぼ同数である。そのうち、特に⑦—2は萩野の婆さんの「卑怯でもあんた、月給を上げておくれたら、大人しく頂いて置く方が得ぞなもし」(八、p. 96)に対する発言で、これも対抗的な発言と言ってよいだろう。⑧—1~19の19例は山嵐に対する発言である。山嵐に対する一人称は「僕」が2例(⑤—1、2)で、「おれ」の方が圧倒的に多い。そのうち、⑧—2~5の用例は対抗的な発言と言ってよいかもしれない。しかし、⑧—6以降の用例は、対抗的と言うより親和的な発言であろう。以上、赤シャツ、萩野の婆さん、山嵐に対しては、割合はそれぞれ異なるものの「僕」と「おれ」という一人称が併用されている。そのため、「僕」という一人称を使う相手の属性は、「おれ」という一人称を用いる相手の属性でもあると考えられる。そのことに留意すると、「おれ」という一人称は「僕」と同様に対等な関係にあると見なしたり、親近感を抱いたりする相手に対して、対抗的な発言や親和的な発言をする場面で使用されると言えよう。

3.3.2 清、生徒、法律学校の書生、芸者、野だ

その他、「おれ」という一人称は清、生徒、法律学校の書生、芸者、野だに対して使用される。

- ⑨ —1 〈なぜ、おれ一人に呉れて、兄さんには遣らないのか〉と清に聞く事がある。(一、p. 12)
- 2 「おれの行く田舎には笹飴はなさそうだ」(一、p. 17)
- ⑩ —1 〈早過ぎるなら、ゆっくり行ってやるが、おれは江戸っ子だから君らの言葉は使えない、分らなければ、分るまで待ってるがいい〉と答えてやった。(三、p. 27)
- 2 「なんでバツタなんか、おれの床の中へ入れた」(四、p. 39)
- 3 「イナゴでもバツタでも、何でおれの床の中へ入れたんだ。おれがいつ、バツタを入れてくれと頼んだ」(四、p. 39)
- 4 〈さあおれの部屋まで来い〉と引っ立てると、弱虫だと見えて、一も二もなく尾いて来た。(四、p. 44)
- ⑪ —1 法律の書生なんてものは弱いくせに、やに口が達者なもので、愚な事を長たらしく述べ立てるから、〈寐る時にどンドン音がするのはおれの尻がわるいのじゃない。下宿の建築が粗末なんだ。掛ヶ合うなら下宿へ掛ヶ合せ〉と凹ましてやった。(四、p. 37)
- ⑫ —1 おれの前へ来た一人の芸者が、あんた、なんぞ、唄いなはれ、と三味線を抱えたから、〈おれは唄わない、貴様唄って見ろ〉といったら(九、p. 111)
- ⑬ —1 しかしさぞ御痛い事でげしようというから、

〈痛かろうが、痛かろうがおれの面だ。貴様の世話になるもんか〉と怒鳴りつけてやったら(十一、p128)

⑨—1、2の2例は清に対する発言である。高田知波は「清を相手にした会話の一人称表現は三例しか出てこない」と指摘していた。そのうち一例は「おれは単簡に当分うちは持たない。田舎へ行くんだといったら」(一、p. 17)に含まれる。会話文と思われる部分を〈 〉で示せば、「おれは単簡に〈当分うちは持たない。田舎へ行くんだ〉といったら」とも考えられよう。そう考えれば、「清を相手にした会話の一人称表現」は2例となる。⑨—1は対抗的な発言と見なせるが、⑨—2はそう言い切れない。これも前述のように「おれ」という一人称が対等な関係にあると見なし、親近感を抱く相手に対して、対抗的な発言や親和的な発言をする場面で使用されると考えてよい根拠となるであろう。

しかし、⑩—1~4の生徒に対する発言の4例、⑪—1の法律学校の書生に対する発言の1例、⑫—1の芸者に対する発言の1例、および⑬—1の野だに対する発言の1例は、それだけでは理解できない。生徒に対しては一貫して「おれ」が使われている。これは対抗的な発言であるものの対等な関係にあり、親近感を抱いているというより、自分より下位の存在と見なしていると考えたほうがよいだろう。法律学校の書生や芸者、野だに対する発言は、従来は言及されていない。これらも同様に対抗的な発言で、相手を自分より下位の存在と見なしていると考えられる。

ここで、改めて「おれ」が語る内容における一人称の使用について整理すると、図2のようになる。

- 「私」…自分より上位にあると見なされる相手に対する一人称であり、校長に対して、および校長が主宰する職員会議において使用される。
- 「僕」…対等の関係にあると見なしたり、親近感を抱いたりする相手に対する一人称である。
- 「おれ」…対等な関係にあると見なしたり、親近感を抱いたりする相手や自分より下位の存在と見なす相手に対する一人称である。「おれ」は、そういう聞き手に対して、あるいは親和的な発言をする。

	私	僕	おれ
上位	校長 職員会議		
対等 親近感		赤シャツ 萩野の婆さん 山嵐	
			清
下位			生徒 法律学校の書生 芸者 野だ

図2 「おれ」が語る内容における一人称の使用

「おれ」が語る内容において、「私」「僕」「おれ」という一人称が相手や場面に応じて、どのように使い分けられているかを検討した。その結果、語り手としての「おれ」が「おれ」という一人称を使用する際の聞き手の属性は、対等な関係にあることや親近感を抱くこと、また、自分より下位の存在であることとして析出できる。しかし、それ以上のことは何も言えない。

ここで、「坊っちゃん」における聞き手に関する先行研究の要点を改めて掲出する。

「〈常識ある他者〉」としての聞き手（小森陽一）

「聞き手としての清の、可能性」（高田知波）

「この人物が気を許した相手」（十川信介）

「『坊っちゃん』を『坊っちゃん』として受け入れる聞き手、『坊っちゃん』が誘う笑いを、笑いとして引きやる聞き手」（菅原克也）

いずれの聞き手も考えられよう。それに加えて、「おれ」が「おれ」という一人称しか使わないのは清のほか生徒や法律学校の書生、芸者、野だも同じであること、「おれ」という一人称は赤シャツや萩野の婆さん、山嵐に対しても使われていることを踏まえれば、語りの場における聞き手は、さらに多様な理解があってよい。「坊っちゃん」における聞き手は「物語世界に姿をあらわさない聞き手」であるが故に、具体的に誰かということ是指摘できない。だからこそ、「坊っちゃん」における語りの場に観察されるのは「おれ」が「おれ」という一人称を使うのにふさわしい相手でありさえすれば、どのような聞き手であってもよい。そこには、たとえば「ハイカラ野郎の、ペテン師の、イカサマ師の、猫被りの、香具師の、モモンガーの、岡っ引きの、わんわん鳴けば犬も同然な奴とでもいうがいい」（九、p. 109）という「おれ」の言葉に「君は能弁だ」（九、p. 110）と感嘆する山嵐のような聞き手や「あまり早くて分からんけれ、もちっと、ゆるゆる遣って、おくれんかな、もし」（三、p. 27）と要請する生徒のような聞き手もいるかもしれないのである。あるいは宴席の場で「あんた、なんぞ、唄いなはれ」（九、p. 111）と声をかけた芸者のような聞き手でさえも。そうして、「おれ」という一人称の用法を分析することによって見出されたのは、聞き手の多様な属性であった。さらに言えば、聞き手の属性が多様なのであれば、それに応じて語り手としての「おれ」もまた、多様な側面を見せることになる。

4. 「坊っちゃん」の語り

内包された作者の概念を援用することによって、「坊っちゃん」の語りが整理され、「書く」と「話す」が統一的に把握された。そうして、語りの場を観察する立場が意識化される。本稿は、そのうち聞き手について検討した。「おれ」の語る内容における会話文は相手や場面に応じて、「私」「僕」「おれ」という一人称が使い分けられている。それらの用例を検討し、語り手としての「おれ」に対する聞き手の属性が析出された。

しかし、これ以上は何も言えないことは、すでに述べたとおりである。それでも清の死後、いまでも「街鉄の技手」（十一、p. 142）として生きているはずの「おれ」が、自分の人生を語るのに相応しい聞き手と出会ったとは言える。そうでなければ、現実の読者としての私たちは「坊っちゃん」を読むことすらできない。「坊っちゃん」は「おれ」が誰かに書き、あるいは話すことで生成する物語なのだ。

（令和元年9月25日受付）

（令和元年12月5日受理）

引用文献

- (1) 夏目漱石「坊っちゃん」は『ホトトギス』(9(7), 1906・4)に発表された後、『鶉籠』（春陽堂, 1907・1）に収録された。タイトルの表記は「坊っちゃん」「坊っちゃん」「坊っちゃん」など論文によって異なるが、引用する際には原文のままとした。本稿は「坊っちゃん」と表記する。
- (2) 本文の引用は夏目漱石『坊っちゃん』（岩波文庫、1989・5改版）を用い、章とページ数を示した。今回、岩波文庫版を底本としたのは平成31年度/令和元年度「郷土の文学と人間」（専攻科2年必修）のテキストとして使用したからである。なお、本稿は受講生に提示したレポートのサンプルを大幅に改稿したものである。
- (3) 中島国彦「坊っちゃんの「性分」、『坊っちゃん』の性格——一人称の機能をめぐって——（『日本文学』27(11), pp.9-16, 1978・11）
- (4) 遠藤祐「『坊っちゃん』（夏目漱石）——語り位の位相」（『学苑』734, pp.1-16, 2001・8）。なお、遠藤祐「『坊っちゃん』——〈おれ〉の物語」（『国文学解釈と鑑賞』66-3, pp.63-70, 2001・3）にも同じ見解が述べられている。
- (5) ジェラルド・プリンス『物語論辞典』遠藤健一訳（松柏社、2004・12増補版第3刷, pp.85~86, 原著1987）
- (6) 語り手の行為に書くことと話すことを含むという言い方に対して、聞き手の行為に読むことと聞くことが含まれるというのは「聞く」という言葉が重複するために十分な言い方ではない。これについて、菅原克也は「英語における“narrator-narratee”の関係は語形的にも対応するが、“narratee”にあたる日本語の表現は残念ながら存在しない。仮に「聞き手」としておく」（「一人称語り」と聞き手——夏目漱石『坊っちゃん』とR・L・スティーヴンソン「ファレシアの浜」——『比較文学研究』100, pp.119-147, 2015・6）と指摘している。本稿においても「聞き手」という言葉を用いた。
- (7) 菅原克也「一人称語り」と聞き手」（注(6)参照）
- (8) 小森陽一「『坊っちゃん』の〈語り〉の構造——裏表のある言葉——」（『構造としての語り』新曜社、1988・4/1989・12第3刷, p.386）。なお、初出は「裏表のある言葉（上）——『坊っちゃん』における〈語り〉の構造」（『日本文学』32(3), 1983・3）、同（下）（『日本文学』32(4), 1983・4）。また、片岡豊・小森陽一編『漱石作品論集成【第二巻】坊っちゃん・草枕』（桜楓社、1990・12）に再録されている。
- (9) 高田知波「『無鉄砲』と『玄関』——『坊っちゃん』論のための覚書——」（『駒澤国文』26, pp.93-104, 1989・2）
- (10) 十川信介「活字と肉筆のあいだ——『心』の「原稿」から」（『明治文学——ことばの位相』岩波書店、2004・4, p. 260）。なお、初出は『文学』（9(1), 1998・1）。